

教育長 様

校番 5 吳宮原 高等学校長
(全日制 課程)

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

令和2年度の後半に、学校経営計画における本校の教育目標、育てたい生徒像、アドミッションポリシーについて、教職員全体で作成・共有する機会を持った。11月30日の職員会議で管理職から教育目標等の再設定について説明のあったのち、12月に全教職員が「宮高生の強み・弱み」「育てたい生徒像及びその育成のために目指す資質・能力」「具体的な取組案」について個々の考えを用紙に記入し、提出した。その集約を基に、2月24日に全体研修を実施し、教育目標等について協議した。それを受け設定した次の「教育目標」を、令和3年度当初に教職員全体で共有し、生徒、保護者、中学校等へも発信している。

校訓「自主・自律」

明るく伸びやかな校風のもと、学力、人間性、健康・体力の「知・徳・体」をバランスよく育むことにより、人生を自分自身で切り拓き、他者や社会に貢献できる人材を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

上記のプロセスにより、協議内容を取り入れた「育てたい生徒像」を、次の3点と定め、年度当初に全体での共有を図った。

自律 ◆ 様々な意見や情報を踏まえて、自分の力で考え適切に判断し行動することができる生徒

挑戦 ◆ 高い目標に果敢に挑戦し、粘り強く努力を続けることができる生徒

貢献 ◆ 他者を思いやり協力して行動することにより、仲間や学校・地域に貢献することができる生徒

また、「育てたい生徒像」の実現のために身に付けさせたい資質・能力として、「自律性」「社会性」「探究する力」の3つの側面を重視した。具体的には、「規範意識」「チャレンジ精神」「他者や地域・社会に貢献しようとする態度」とともに、「探究する力」として、Society5.0に向かう社会で求められる力の要素としての「文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」の育成を目指す。

(3) 学科等の特色

吳地区にある普通科全日制高校として、吳三校の一角を担う伝統校である本校は、特色を失いつつあった。今後、宮高らしさを取り戻す取組の推進とともに、吳宮原高校版「学びの変革」(学習者基点の授業づくり、吳市をフィールドとした「屋根のない学び舎」プロジェクトによる探究活動、ICT機器を生徒が有効に活用した学び、「地域の中の宮高」プロジェクトによる地域貢献活動、国際交流)の推進による学校の特色づくりを着実に進めたい。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標 (3年間で取り組むカリキュラム開発の重点目標)

ア 吳から社会・世界へ 地元「吳」を題材に身近な事象に興味・関心を持ち、探究力をつけ、最終的に自己の進路や、幅広い分野・社会へとその見方・考え方を応用していく流れを完成する。

イ 大人・地域との繋がり 吳市役所・地域ゆかりの大人・同窓生とさらに連携を深め、学校と地域がいつでも繋がれるネットワークを確立し、生徒が地域に関心を持ち、主体的に探究活動を進められる土台作りを進める。

ウ 校内での有機的な関わり合い 校内において生徒・教員が学年・教科・分掌などを越えて繋がり合える仕組みを、まず「総合的な探究の時間」において作り上げ、その他の教科でも応用できるものとする。

エ 将来に応用できる探究スキル⇒持続可能な探究 探究活動の経験が“将来に活かせるもの”となることをゴールとし、自らの必要性に応じた「適切な情報収集」・「情報の整理・分析・まとめ」・「目的に応じて効果的な手段を用いた

発表・伝達」・「アイデアの実践 (=アクション)」に向かえる生徒を育成する。

オ **個々の強みを活かし、生徒と共に楽しめる総合的な探究の時間ならびに授業計画** 教員が「総合的な探究の時間」以外の時間でも、その見方・考え方に探究的な視点を意識し、教科特性に合わせ実践している。

(2) 3年後の目指す学校の姿

ア 3年間の探究活動の段階ごとの「ねらい」「具体的活動」「評価の観点」を学校全体で共有できている。

イ 「総合的な探究の時間」の探究プロセスは誰にでも取り組め、その時々状況に応じて常に修正・変更できる持続可能なものである。

ウ 「総合的な探究の時間」以外の教科や学校活動においても、探究的な見方・考え方が活かされている。

エ 「総合的な探究の時間」の活動をきっかけに、生徒や教員が学年・教科・分掌を越えて有機的に関わり合える仕組みがある。

オ 「総合的な探究の時間」の活動にある程度の自由度が保たれ、生徒や教員が個々の興味や強みを活かして楽しめるものである。

カ 探究委員が中心となり、生徒が主体的に探究活動を進められる場面が意図的に設定されている。

キ 生徒の探究活動の成果に深まりを持たせるために、複数回の中間発表+修正・吟味の場が設けられている。

ク 「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、生徒や教員が地域・保護者・同窓生とさまざまな形で繋がるネットワークがある。

ケ 生徒の探究活動が、提案型から実践型へ向かうチャンスがあり、アイデアを形にする生徒が生まれている。

(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット (活動指標)

○ 各学年の総合的な探究の時間において、それぞれの探究の段階ごとの活動・ねらい・評価方法が生徒・教員に共有され、特に評価方法においては、シンプルなルーブリックが完成し、活動前に示すことができる。

○ 総合的な探究の時間と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップ作製の前段階として、各教科会で、教科・科目の見方・考え方を生かして探究的な取り組みが実践できる単元や場面を想定する時間を持ち、教科主任会議ならびに校内研修にて共有する機会がある。

○ 「屋根のない学び舎」プロジェクトが徐々に動き出し、生徒や教員が地域・保護者・同窓生とさまざまな形で繋がるネットワークが生まれつつある状況にある。

イ アウトカム (成果目標)

【生徒・教員・保護者によるアンケートの結果より】

○ 「あなたは総合的な探究の時間で行う探究学習に積極的に取り組んでいる」について「そう思う」が70%以上である。

○ 総合的な探究の時間の探究活動の段階ごとのルーブリック評価を徐々に取り入れることで、「自らの探究活動が深まったと感じられた」が70%以上である。

○ 「自分たちで考えたり考えたことを表現したりする場面がある」が70%以上である。

○ 「探究活動を通して(総合的な探究の時間だけでなく)自分の学力や技能が向上したと実感する」が60%以上である。

○ 「本校では総合的な探究の時間の時間以外でも、探究的な視点が重視されていると感じる」が70%以上である。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」において、各学年とも次の名称で実施している。

(1学年: 宮高サーチ, 2学年: 宮高ゼミⅠ, 3学年: 宮高ゼミⅡ)

イ カリキュラム開発の概要 (令和3年度の具体的なあ取組内容)

「屋根のない学び舎」プロジェクトの取組を進めている。生徒の学びの場を校外に広げ、地域の大人や活動と繋がることを通して、刺激や気づきを得て、自分たちの視点で動き出す力を育成するプロジェクトである。生徒が、将来的に地域を大切に思い、身近な問題を自分ごと捉え、自分にできる何かを実践しようとすることを目指したカリキュラム開発を工夫している過程である。「地域と自らの興味関心を結び付けた課題発見・解決学習」の力を、他教科の学びや、一人一人の進路実現、また、その先にも応用できるものとした。

(マクロレベル) カリキュラム開発に先んじて、本校の生徒の「強み」と「弱み」を全教職員で出し合い、共有し、育て

たい生徒像を明確化した。その上で教育活動の土台となるマスタールーブリックを作成し、これを総合的な探究の時間における生徒の活動における生徒の活動状況の見取り指標としても利用できるものとした。また、本校で3年を経過した地元「呉」を題材とした総合的な探究の時間の取組を振り返り、改善のための課題1～6をあげ、教職員で共有すると共に、具体的な改善策を、実現できるタイミングで柔軟に取り入れ実施した。

(マイクロレベル) 以下はそれぞれの課題に対する今年度の取組内容である。

課題1 探究活動をもっと深めたい。

⇒探究を深めるための「質問力」「問いを立てる力」を育てるため、日常的な活動から全体的な研修に至るまで「質問力」に焦点を当てて取り組んだ。具体的には2学期より1学年週1回の朝読をスタートし、学年団の教員が順番で様々な題材を提示した。その際、質問+スモールトークの時間も加えた。また、12月に全体研修として、1学年の宮高サークルにおいて、「質問力」をテーマにしたフリーライター(同窓生)とのオンラインセッションを実施。協議会では教職員によるマスタールーブリックでの検証も試みると共に、広島大学難波博孝教授の御指導・御助言をいただいた。

課題2 提案だけでなく実践へとチャレンジさせたい。

⇒11月、1学年がクラス単位で行う「呉を知る」のフィールドワークにおいて、初の生徒ガイドによる実施を試みた。5カ所のフィールドワーク先のうち1カ所に限定した試みであったが、生徒が事前に現地で取材を行い、当日は生徒が案内をした。準備不足が露呈したが、次のチャレンジへの大きな収穫があった。

課題3 呉市内外で活躍する同窓生のネットワークを広げたい。

⇒11月～2月、1学年「呉を知る」の活動において、これまでの講演とは違う新たな分野で活躍される同窓生のご協力を得ることができた。コロナ禍でもオンラインで活発な双方向の講演が実現できた。

課題4 3年間の総合的な探究の時間で、クラス・学年・教科・分掌を越えて有機的に関わる仕組みを作りたい。

⇒5月～6月、本格的な「呉探究」を行う2学年の生徒と同様のテーマを経験した3学年の生徒との連携を計画したが、生徒・教員共に、ねらいを共有する十分な時間が確保できず実現できなかった。

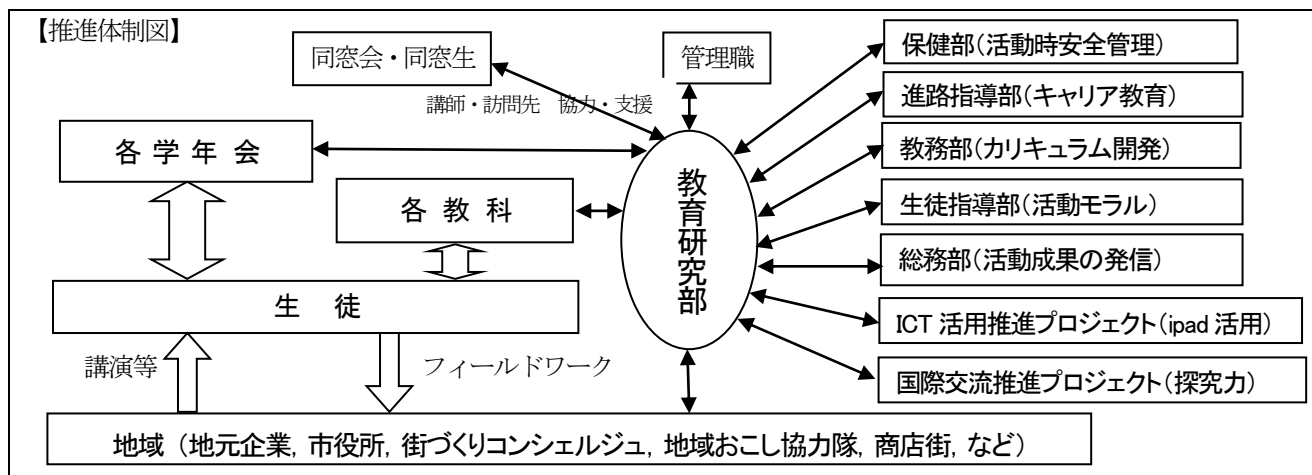
課題5 コロナ禍でフィールドワークが困難でも人と繋がらせたい。

⇒コロナ禍で現地の人を訪れるフィールドワークには、いくらか困難が生じたが、電話やメールによる取材を積極的に進めるチームが例年より多かった。一方で、コロナ禍でも、タイミングを上手に見計らい、教員の助けも得ながら例年と変わらぬフィールドワークを実施したチームもあった。来年度への参考例としたい。

課題6 生徒の探究活動の歩みを残し、後輩が先輩の探究に学び、継続探究できるようにしたい。

⇒先輩の探究に学ぶこと、また先輩の探究テーマの継続探究に取り組むことは、課題1の「探究活動をもっと深めたい」の解決にも繋がる。3年間が経過した本校の「呉探究」だが、全生徒の探究の歩みが後輩達や教職員に共有できるものとして残っていない。2学年の探究活動の成果発表となる2月のポスター発表会のポスターと、その簡単な説明は、昨年度よりデータ化し、iPadで後輩も共有できるものとなった。一方で、より主体的で進路実現に繋がる内容となっている3学年の個人レポートは共有できていない。今後は3学年のレポートを確実に保管し、紙媒体としても残し、後輩達の探究活動・進路研究にも活かしていく必要がある。

ウ 校内体制



- カリキュラムの開発過程で全教員の参画を行うために、校務運営会議・教科主任会議・各教科会議を活性化する。その際は、教育研究部が中心となり、総合的な探究の時間のねらい、具体的な取組、本校のめざす姿を共有する。また、校外で開催されるカリキュラム開発に係る研修を、より分かりやすいものに加工して校内で共有する。
- フィールドワークで校外と連携する際は、教育研究部が中心となり、学年団で事前の打ち合わせを確実にを行い、全教員が不安なく連携できるようにすると共に、万一トラブルがあった場合に必ず全体のものとして共有し、丁寧に対応する。
- 「屋根のない学び舎」プロジェクトの充実のために、呉市・同窓生・保護者へのネットワークを広げていく。その際、教育研究部が中心となり、これまで協力頂いた訪問先や同窓生との連携を行うが、管理職・全教職員また、保護者の協力も得ながら、新たなネットワーク作りの基盤を強化する。

(5) 学習評価

- 生徒の探究活動の各段階（課題テーマ設定・情報収集・整理とまとめ・発表）ごとに、基本的なポイントについて、自己評価・相互評価を行った。教員は一連の探究活動において、生徒の状況を見取りながら、指導助言を与え、探究の深まりを支援した。探究内容に深まりを持たせるために、探究の段階ごとの評価基準として、シンプルなルーブリック形式の評価を作成・実施することが今年度の目標でもあったが、実現できなかった。年度途中で新しい取組をスタートしたこともあり、教育研究部ならびに学年会で評価基準を作成し、生徒にも確認させるような余裕がなかった。年度末には文章による評価を3段階で行っている。
- 年度末に1学年において、初めて思考力テスト（GPS-Academic）を実施した。今後、年度ごとの変化を見ていきたい。一方で、GPSテストの結果については、本校の全体的な教育活動における結果としての思考力の深まりを見るための参考データと捉えている。総合的な探究の時間に係わる生徒の資質・能力の高まりを図る1つの物差しとしたい。

(6) カリキュラム評価

- 本校ですでに実施している学校評価アンケート・授業評価アンケートとは別に、総合的な探究の時間に焦点をあてた具体的な質問項目を加え、独自のアンケートを作成・実施し、取組を検証する予定であった。今年度は具体的なアンケート項目が決定できず、例年実施している学校評価アンケート・授業評価アンケートでの「総合的な探究の時間」関連項目を評価の材料とするしかなかった。学校全体のカリキュラムをいつ、どのように評価し、カリキュラム改善に生かしたかについて、マクロレベルの視点とミクロレベルの視点で、量的・質的なデータを分析した結果を示して記入することは、今年度は難しかった。この点は来年度への課題としたい。生徒の探究活動におけるプロセスや成果からの見取りにより明らかになった今後の改善点については、まず教育研究部内で共有・吟味し、どの場面・どの方法で修正を加えていくか検討する。研究開発指定校としての最終年度においては、初年度で「3年後にめざす姿」として挙げた項目についてのアンケートを行い、生徒・教員・保護者・地域による評価をいただく。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

令和3年度の目標については、コロナ禍での予定変更があり、急きょ新しい取組を行うなどしたため、年度当初に目標としてあげた項目の全てを検証することはできなかった。以下は成果を見ることができた項目についての記述であるが、分析のための量的なデータが十分ではなかったと思われる。

【生徒・教員・保護者によるアンケートの結果より】

- 「あなたは総合的な探究の時間で行う探究学習に積極的に取り組んでいる」の項目について、生徒の「そう思う」の回答が70%以上を目標としたが、これについて全体の数値は61.2%であった。「ある程度そう思う」の肯定的な回答を合わせると97%になるが、チームで取り組む2学年の呉探究ポスター発表によると、担当教員の見取りを参考にしても、まだまだ深まりが足りない実態がある。同様の項目での学年毎の比較では、1学年67.5%、2学年59.6%、3学年55.9%となり、「そう思う」の回答は学年が下がるほど高い。これは年々カリキュラムを工夫改善しながら進めてきた探究活動の成果と思われる。
- 「本校は、総合的な探究の時間で行う探究学習に積極的に取り組んでいる」の項目について、保護者の「そう思う」の回答が34%。これは555人中の190人にあたる。毎年40～50人単位で数値が上昇しているが、「あまりそう思わない」「分からない・未回答」も21%あることは改善点となる。また、教員45人を対象とした同様の項

目で、「そう思う」が22人、62%という数値であるのは、本校の総合的な探究の時間がまだまだ全体を巻き込むものとなり得ていない結果と考えられる。

- 「自分たちで考えたり考えたことを表現したりする場面がある」の項目について、生徒の「よくあてはまる」の回答が70%以上であることを目標としたが、結果は59.2%。「ややあてはまる」は32.3%であった。肯定的な回答を合計すれば90%を超える数値である。この項目は、特に「総合的な探究の時間」だけを想定したものではなく、本校での学習活動全域に関する項目である。その点においては、今後の総合的な探究の時間における取組改善がさらに進み、各教科の見方・考え方を活かした「探究的視点」の工夫が広がりを持つにつれ、数値が上がってくると期待したい。

(2) 課題

令和3年度の目標に対して、より多様なアンケート項目を加えて結果を分析する必要がある。また、数値では判断しにくい点を文章で振り返る機会も、年1回は設定したい。例えば、生徒のアンケート項目にある「探究学習に積極的に取り組んでいる」という記述について、具体的にどのような場面でそう実感しているのかを記述させたい。また、今後の課題として、「総合的な探究の時間」と「各教科」、あるいは「総合的な探究の時間」と「実生活」の関連性を、生徒が実感できるものになっているかを問う項目も、アンケート内容として考慮したい。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- 探究を深めるため、探究プロセスに複数回の中間発表+修正・吟味のを設け、「質問力」「応答力」の育成を図る。
- 探究活動がより生徒主体となり、提案型から実践型へ向かう生徒がいる。（アイデアを形にできる生徒が増えている）
- 探究的な見方・考え方が、総合的な探究の時間だけでなく、その他の教科や学校活動においても実践されている。
- 「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、生徒や教員が地域・活動・保護者・同窓生などと繋がる仕組みがある。
- 総合的な探究の時間の活動にある程度の自由度が保たれ、生徒や教員が個々の興味や強みを活かして楽しめるものとなっている。
- 本校の探究活動に関する意見を集約できるアンケート項目を設定し、学校評価アンケートと授業アンケートに加える。

イ アウトカム（成果目標）

成果の判断材料とするアンケートのチェック項目には、例年のアンケート項目だけでなく、本校の探究活動への分析・吟味・改善につながるより具体的な項目を加え、着実に数値が向上していくことを目指す。

- 「あなたは総合的な探究の時間で行う探究学習に積極的に取り組んでいる」について「そう思う」が70%以上である。
- 「探究活動で経験したことや考えたことが、自分の学力や技能の向上に役立ったと実感する」が70%以上である。
- 「総合的な探究の時間だけでなくその他の教科や活動においても、自分たちで考え、表現する場面がある」が60%以上である。
- 「本校では総合的な探究の時間の時間以外でも、探究的な視点が重視されていると感じる」が60%以上である。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

令和3年度を取組を振り返り、令和4年度に向けた方向性として、新たに以下の点を考慮する。

- 探究活動で生徒に育てたい資質・能力として、「質問力」「問いを立てる力」を引き続き強化していく。その際、「総合的な探究の時間」だけでそれを行うことは不可能であり、各教科を巻き込んで取り組む必要がある。教育研究部はそのための場面作りをする。例えば、公開研究授業で「探究的視点」を考慮した研究授業を提案する。
- 「質問力」「問いを立てる力」と密接に関連する『応答力』の育成を、同時に工夫していく。
- 学術機関・地域と連携し、ねらいを共有しながらコラボレーション（協働）での活動を模索していく。例えば、本校の生徒による高校生ガイドの実践に向けて、地域・大学機関と連携し、持続的な取組となる土台をつくる。
- 探究委員の活躍場面を増やし、生徒の意見も活かしながら、学校内外の探究活動をより生徒主体としていく。

イ 校内体制

令和3年度同様、「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発に関しては、p.3の【推進体制図】に示す通り、教育研究部が校内における情報共有・活動推進の中心を担い、地域連携の窓口となる。以下は令和3年度の状況を考慮した上での令和4年度の留意点である。

- 4月当初の研修で、転入者も含めて改めて本校の総合的な探究の時間の3年間の流れやねらいを共有する。1学年「宮高サーチ」、2学年「宮高ゼミⅠ」、3学年「宮高ゼミⅡ」の流れが、どの学年からもわかるよう、日常的な情報発信を行う。
- 総合的な探究の時間の取組については、まず教育研究部と学年会の連携を密にし、実施内容への理解を得るよう努める。生徒の探究活動の伴走者として、最も身近な存在である教員の本音や提案を聞き取り、即日々の実践や修正につなげやすいのが学年会である。共に本校の総合的な探究の時間作り上げるチームとして協力していく。
- 各教科における「探究」については、教科主任会議と連携し、各教科の見方・考え方を活かした探究的視点を育てやすい時期・単元を考える所から始める。無理やり総合的な探究の時間の取組と直結させず、最終的につながっていたということが認識できることが望ましい。
- 教育研究部は、探究活動を通して育成したい生徒の姿が全体として理解・共有されていることを確認しながら、それぞれの部署・地域・保護者・生徒・学年団と連携を保ち、前向きな提案・アイデアならびに必要な軌道修正を柔軟に取り入れながら進むように気を配る。

【主担当者（職名・氏名）】 教諭・野宮三鈴

【指導助言者（所属・職名・氏名）】 ■広島大学・大学院人間社会科学研究科教授・難波博孝様
■小さな出版者ちようちょ人間・フリーライター・丸古玲子様

【指導助言者との連携時期や内容】

- 主に2学年の探究活動における中間発表会（年間2回）・最終発表会（年間1回）に関わる事前事後の指導助言
- 課題発見・解決学習に係る教職員研修の指導・助言
- 1学年宮高サーチにおける「呉を知る」の講演、2学年宮高ゼミⅠにおけるフィールドワーク事前指導の講演
- 1学年の探究活動における「質問力」を高めるためのオンライン双方向型講演